

7月18日（火）その44 いくら回されても針は天極を指す

全員の検証授業が終わりました。一つの大きな山場を乗り越えましたね。お疲れ様でした。テーマを設定し、理論研究をして、そして検証授業をするという、この4か月間の「結晶」でしたね。一番感謝して欲しいのは、皆さん方一人でやったのではなく、多くの方々が皆さんのために動いてくれたということです。所属校の校長（園長）、教頭やその他の先生方、指導講師の皆さん、授業を見に来てくれた近隣校の先生方、そして琉大の森先生や川上先生及び学生の皆さん……いろいろな方々が、日程を調整して検証授業に参加してくださいました。そして何よりも、皆さんの「見せる授業」を十分意識して頑張ってくれた「子ども達」、感謝ですね。

何度かお話をしましたが、「おせち料理」のようにものすごく材料や時間をかけて準備した「授業」と、「普段の食事」のように手近な材料と限られた時間を使って準備した「授業」とがありますね。一番大切なのは、普段の授業ですね。今回の授業を作り上げるまでの「過程」を忘れないで、10月以降学校に戻ったら、皆さんが実践していく「普段の授業」にこそ大きな意義があるのです。もし研究所に来る前と変わらない授業であるならば、6か月間の研修は、身にならなかったということになります。昨年度よりは、一歩も二歩も質の高い授業実践ができると思います。期待しています。そして頼まれたら、「おせち料理的な授業」もできる先生であってほしい。バックボーンは、「学習指導要領」（教育要領）であり、「本県の施策」なのです。

昭和の偉大な教育者東井義雄のことをお話しします。彼は、兵庫県の教育者で昭和36年・1961年から校長を務め、3校で13年間校長を務めています。数多くの論文や著書があり、多くの教育賞に輝いている日本の教育界のレジェンドです。

昭和39年・1964年に9年間校長を務めた八鹿（ようか）町立八鹿小学校に着任します。その際に校長室に「ある額」を掛けました。その額には文字が書かれていて、詩人の高村光太郎の言葉「いくらまわされても、針は天極を指す」とありました。「針」とは磁石の針、「天極」は北極星のことです。

東井は、「私の天極は『子ども達』です。今日もいろいろな雑事や雑音が私をふりまわしそうですが、どんなときにも、天極を忘れて狂わせたりしないでいきたいと自分に言い聞かせています。」と、述べています（東井義雄一日一言・致知出版社）。

「人材を以て資源と為す」という言葉は、沖縄だけに限らず資源の乏しい日本全体についても言えることである。これまでも、そしてこれからも教育の本質であり、「不易」なものであろう。

東井義雄さんは、「村を育てる学力」という本の中で、「ふるさとのあるかしこさ」を中心に据えて、主体的に生きるための学力や自己教育力を育てていくべきである。そのことが、たとえ村を出て行くことになったとしても、その地で生きがいを見だし主体的に生きていけるであろう」と述べている。

皆さんが教える子ども達は、将来どこで生きていくのかわからない。地元に残る子もいれば、他市町村、県内で生きる子もいるだろう。あるいは他府県や世界に飛び出す子もいることだろう。どこで生きていくことになろうとも、粘り強く生き抜いていける人間に育ててほしいものですね。

少し時間をオーバーするが、東井義雄の詩をいくつか紹介しよう。

○どの子ども子どもは星

どの子ども 子どもは 星
みんなそれぞれが
それぞれの光を放って 輝いている
パチパチまばたきしながら
子どもは 自分の光を見てもらいたがっている
光を見てやろう
まばたきにこたえてやろう
光を見てもらえないと
子どもはまばたきをやめる
光を消す
光を消しそうにしている星はないか
まばたきをやめそうにしている星はないか
光を見てやろう
まばたきにこたえてやろう
そして 天いっばいに
子どもの星を かがやかせよう

○やまつつじ

おや 山つつじだ
寒い 長い 冬であったのに
深い 深い 雪であったのに
しかし 山つつじは いま咲いたのではないのだ
咲いているのは いまだけれど
長い 冬の間
重く冷たい雪の下で 用意をしていたのだ
花の用意をしていたのだ
春の到来を信じて 用意していたのだ
咲いているのは今だが
いま咲いたのではないのだ

○いのちにふれて

物体でさえそれを動かそうとすれば、それに触れねばならない。
まして、子どもは生きている。そのいのちに触れねば教育はできない。

○子どものドキドキを

子どもの胸の中の「ドキドキ」をキャッチする心を持とう。

○子どもの中の雑草

子どもの中でも、早く引き抜いてしまわなければならない「雑草」の方が、
私たちが育てようとしている「作物」よりも、相当力が旺盛だ。

※東井義雄一日一言「いのちの言葉」（致知出版社）より

7月19日（水）その45 3つの「木綿のハンカチーフ」

全員が検証授業を終えた14日（金）の夜、慰労会がありました。3連休でもあるし、授業を終えての安堵感から皆さんビールがすすんでいるように見えました。みんなでカラオケの「2次会」にも行きました。私は数年ぶりのカラオケで、大変楽しい時間を過ごさせていただきました、ありがとう。それぞれの「十八番」（おはこ）の熱唱に聞き惚れていました。「あ、この歌が彼（彼女）の心に刻まれている歌なんだ！」と思いました。

酔っ払いの44才（女性）が、「伊代はまだ16だから・・・センチメンタルジャーニー」と歌っていましたね。（笑）

それから、誰だったか「木綿のハンカチーフ」を歌っていました。

「木綿のハンカチーフ」は、太田裕美さんの歌で、昭和51年（1976年）に大ヒットしました。作詞は、後に松田聖子さんの歌などを手がけ、日本のトップヒットメーカーに上り詰めた松本隆さんです。男女の掛け合いで構成される大変新鮮な歌詞でした。男が仕事で都会に出て行き、女が田舎に残り、遠距離恋愛を続けます。しかし次第に男は都会に馴染み染まっていきます。そして破局を迎え、まるでテレビドラマを見ているような感じの歌です。素晴らしい詩と曲、それに太田裕美の感情を入れすぎないドライな声がよくマッチしていて、失恋の歌なのに明るくテンポのよい歌でしたね。

そう言えば数年前、AKB48の一員だった前田敦子の映画「イニシエーションラブ」（通過儀礼の愛）を映画館で見ました。その映画は、木綿のハンカチーフを一つのモチーフにしている、映画の中でもこの歌が流れていた。

物語は、女性に奥手で引っ込み思案な男性が、ふとしたきっかけである女性とつきあうことになる。彼は彼女のためにダイエットをしたり明るくなろうと努力したりする。そして数年後スリムなイケメンになった彼は、地元の会社に就職していたが、東京本社への転勤を命じられる。遠距離恋愛が始まり、しばらくは車を飛ばして頻繁に彼女に会いに来ていたが、東京の本社では彼に接近してくる女性がいた。・・・そしてだんだん彼は変わっていく。彼はクリスマスイブの一夜を東京の女性と共に過ごす。しかし田舎に残してきた彼女への罪意識も断ち切れず、東京の女性を振り切り田舎の彼女の元へと車を走らせる。衝撃のラスト5分・・・「えっ!」、私はしばらくの間、口をあんぐりと開け状況が飲み込めなかった。その後原作本を買い、丁寧に読み直した。「ネタバレ希望」の方が多ければ、結末をお話ししますが・・・（笑）。

7月8日（土）の琉球新報の投書欄に「木綿のハンカチーフ」と題するエッセイが掲載されていた。現在64才の方が、ほろ苦い青春の一ページを語っていた。高校時代から彼女がいて、彼女が東京の大学へ進学し、彼は沖縄の大学に進学する。そして逆バージョンで、彼女が段々都会に染まっていくのである。そしてついに彼女から最後の手紙が届き、「東京で好きな人ができ東京で生きていく」と書かれていたとのことである。

どんな歌が心に染みるのかは、そのときどのような人生経験をしていて、どのような心のありようだったのかにもよる。感受性の強い時代の歌ほど心に刻み込まれる。この歌がヒットしたとき私は大学3年生で、遠距離恋愛のショックから立ち直っていたので（その36参照）、感情移入せずに、冷静に「木綿のハンカチーフ」を聞いていたのであった。（笑）

7月20日（木）その46 真実は「藪の中」、誰が嘘をついているのか？

黒沢明監督の「羅生門」という映画をレンタル DVD とかで、見たことがありますか？敗戦で日本人が日本のもの全てに自信をなくしていた昭和 25 年（1950 年）に公開されました。この映画は世界中から大絶賛され、黒澤明監督が「世界のクロサワ」となるきっかけになりました。

原作は芥川龍之介の「羅生門」と「藪の中」を合体させたものです。ある夫婦が旅をしていて、人里離れた場所で一人の男に出会います。その男は夫を縛り上げ、夫の目の前で妻を強姦します。……そして夫が死に、多襄丸（たじょうまる）という強姦した男が逮捕されます。

物語は検非違使（今の警察官の様な人）による関係者への尋問の場面になります。ところが多襄丸と死んだ男の妻の言い分が異なります。また事の成り行きを目撃していた人がいて、その人の話も食い違います。そこで霊媒が登場し、亡くなった夫の霊を呼び出し尋問します。すると夫の言い分も違っていたのです。4 人とも言い分が違い、真相は「藪の中」……。

まさに「藪の中」。安倍晋三首相のお友達が理事長を務める学校法人「加計学園」の獣医学部新設計画を巡り、国会の「閉会中審査」が 10 日行われた。参考人招致された文部科学省の前川喜平・前事務次官は、「不公平、不透明な部分がある」、「背景に官邸の動きがあった」と指摘し、萩生田光一官房副長官や和泉洋人首相補佐官から早期開学を迫る圧力があったとの認識を示し、「始めから加計学園に決まるようなプロセスを進めてきたように見える」と発言した。これに対し、萩生田官房副長官も従来通り関与を否定し、両方の主張が平行線のまま審査は終了した。

「閉会中審査」のニュースを見ていると、解説者が「前川前事務次官は、真摯に始終冷静に理路整然と話をしているような印象を受けた。これに対し政府側は、萩生田氏の答弁の歯切れが悪かったり、大臣が原稿を棒読みしたり、文科省の幹部が「記憶にございません」を連発したりで印象がよくなかった。菅官房長官も早く幕引きをしたい！という強引さがにじみ出ているようだ」と、こんな意味のことを語っていた。

大学教授の寺脇研氏が、新聞で論評をしていた。「国会参考人質問に一人で乗り込んでいくのは、敵地に一人で乗り込むようなもので、すごいことだと思う。どれだけの思い、強い覚悟できているのかがわかる。まるで西郷隆盛のような強い精神力があり、霞が関の官僚であそこまでの人はいない。それは国民の皆さんにも伝わっただろう。」と述べていた。

政府は最初は、「閉会審査は必要ない。」と強気だったが、東京都議会選挙の地滑り的大敗を受けて、開かざるを得なくなった。安倍総理が欧州歴訪中に開いたり、キーパーソンと名指しされた和泉洋人首相補佐官を欠席させるなどの「戦術」で臨んだが、「真摯に説明責任を果たす」とした首相の言葉に疑問を持たざるを得ないような結果となったと、新聞は報道していた。

14 日（金）の朝の報道では、安倍総理が、「予算委員会を開き、出席してきちんと説明する。」と述べていた。24～25 日に開かれるようである。

また昨日の新聞では、稲田防衛大臣の国会における虚偽説明が大きく報道され、今朝は山本幸三司法再生大臣が、決まる 2 か月も前に「加計学園だ！」と発言していたとテレビで報じていた。安倍総理は、支持率も低下し、ますます窮地に追い込まれている気がする。